

2. 景観形成計画

1) 骨格となる景観形成の考え方

(1) 基本方針

- 面的に連続する緑地景観の創出
- 富士山方向の眺望を基軸とする景観形成
- 地形特性に応じた主な視点場からの風景の演出
- 施設（特に大型構造物や面的施設）整備における景観的配慮
- 1年24時間を通じて楽しむことのできる風景づくり
- 回遊を誘導するための視点場の意味づけや環境演出

(2) 骨格となる景観構造

① 富士山方向の眺望軸での景観形成

日本平の特徴は、地形の成り立ちそのものが「富士山方向の眺望軸（富士見の眺望軸）」を形成し、また、富士山が遠望地にあることで、視界に広がるパノラマ景（三保や清水港等の駿河湾と富士山に連なる山並み、さえぎるものがない天空の青空）と捉えることができる。

- ・地形成りで面的に連続する緑地空間そのものを「富士見の眺望軸」に位置付け、どの位置からも雄大な富士山のパノラマ景が望めるよう、芝草等グランドカバー種による大らかな草地による景観形成を図る。
- ・規模を有する敷地にあって雨天日等、富士山が見えない時の道先案内として、回遊路上の主な視点場に富士山方向を指し示す道しるべを配置し、併せて日本平と観富の歴史文化等、風土を取り込んだ環境整備によって、心象としての富士山の風景を提供していく。

② アプローチの演出

本公園へのアプローチは、日本平パークウェイに限られるため、公園区域内の範囲については公園への期待感を演出するための沿道景観の修景を行う。

③ 面的景観演出

「面的に連続する緑地」景観を基本とするため、芝生や花卉等グランドカバーを基調とした広がり感をベースに、視点場からの風景に変化を持たせるため、地形に即した修景を行う。

④ 視点場の配置

本公園は広大な面積を有しているため、全域を巡る移動長は相当の延長となる。そのため、展望地であると同時に、高齢者等の利用にも配慮した休憩地としても利用できるよう、一定距離（概ね200～250m）を基準として視点場を配置する。

⑤ 移動の景観シーケンス

本公園での主要レクリエーションメニューとした「四周眺望地を巡る散策回遊」を誘導していくため、各視点場間をつなぐ園路についても、風景を楽しむことのできる沿道修景等、シーケンス景に配慮する。

(3) 主要施設の景観的配慮

① 駐車場

○日本平パークウェイからの可視

- ・道路面から台地形に盛土造成し、斜面地を利用した連続する緑地と、沿道修景植栽（並木）によって、駐車場を見せないよう工夫する。

○公園アクセス道路

- ・仮設駐車場区間は、パークウェイの措置と同様に斜面緑化によって対応する。
- ・エントランスについても日本平ホテル側と併せて、パークウェイを掘込み道路のように見せる工夫を施す。
- ・常設駐車場区間は徐々にレベル差を小さくし、駐車柵間の並木が連続する修景を図る。

○山頂部の各視点場・園路からの遮蔽

- ・大型車、常設乗用車、仮設乗用車の各ブロック間にレベル差を解消するための緑地を設け、樹冠のボリュームのある樹木による密植を行う。
- ・公園センター（建築物）との一体整備が可能な範囲について、車寄せ及び大型車駐車場の天蓋に人工地盤面を覆蓋し、丘陵斜面地緑地と景観的に連続させる。
- ・常設駐車場の駐車柵間に低木植えつづしと高木列植を施す。
- ・仮設駐車場については、芝生ブロック等によって緑化を図る。

② 公園センター

山頂斜面地と一体なるように配置し、かつ地階で床面積を確保することで地上階を1層とする構成とする。景観修景的には、背面の丘陵斜面地緑地が建物屋上階ににじみ出すような形での屋上緑化を図ることで、ボリューム感を極力抑えるよう工夫する。

③ 展望施設

デジタル塔の電波障害への対処及び久能海岸側からの見られ景観に配慮し、施設高（屋根面）を電波障害の上限（管理者と協議）以下に抑えた施設形態とする。

④ 宿泊迎賓施設（日本平ホテル）

山頂部からの可視及び公園外からの見られ度（スカイライン）等から、建物高さは、現状の展望ラウンジを除く高さ以内とすることが望ましい。

2) 景観のストーリーと演出

(1) 景観演出の視点と基本的考え方

<テーマ> “日本平一年360°の景”

名勝日本平及び日本平公園が有する良好な景観を「景観軸」として整理し、「地域風土」をも考慮に取り入れた「景観要素」として組み合わせることで付加価値を高め、景観が有する価値を再認識してもらう。特に富士山への景観は本公園の最大の魅力であり、歴史的背景からも日本の美の原点ともいえる景観であることから、名勝及び本公園の主要景観である「富士見の景観軸」として設定する。

富士見の景観軸

本公園のランドマークとなる富士山への景観軸で、敷地のどの場所からでも富士山を眺めることができ、来園者は常に無意識のうちに富士山の方向を意識することができる。

静岡からの富士の眺めは古来より最高の景観として評価されており、特に安藤広重の東海道五拾三次之内・江尻「三保遠望」、狩野探幽の「富士山図」などは本公園である日本平周辺からの構図であるとされていることから、三保の松原を前景に日本平―清見寺―田子の浦―富士山を結ぶ景観は日本の風景絵画の原点であると考えられる。また、徳川家康の廟として築かれた久能山と富士山、これに日光を軸線で結ぶ「富士見＝不死身となり日光で大権現となる」という歴史的な言われなど、日本平からの富士の眺めは日本画の構図と共に日本人の原風景であるとも考えられる。

名勝指定地を含む本公園内からの富士山への景観は、富士山、三保の松原、清水港などの構図バランスや季節、時間帯によって様々な見え方があることから、富士山の方向に延びる本公園敷地全体を「富士見の景観軸」として捉え、そこに利用者それぞれが好みにあった景観を楽しむことができるような「富士見の視点場」を用意することで、本景観軸の効果を高めていく。



安藤広重：東海道五拾三次之内・江尻「三保遠望」



狩野探幽：「富士山図」



五姓田義松(1855-1915)「富士」



司馬江漢(1747-1818)「駿河湾富士遠望図」

(2) 景観軸の演出

4本の「節気の軸」によって景観軸を整理し、対象の景観に対して季節性を重ね合わせることで「景」としての価値を高める。

富士見の景観軸

本軸は本公園地形の傾斜方向である北東軸（北より+30°）であり、本公園の主景観軸として設定し、主に富士山を眺望できる秋～初夏を景観対象とする。本軸は公園のどこにおいても常に意識される景観軸であるが、特に下記の「富士見の視点場＝富士見八景」（例）を設けることにより、日本平公園の特徴ある魅力づくりを目指すものとする。

○里の探梅（静岡の郷土と富士の景）

百花の魁である早咲きの梅（深梅）を求め逍遙する春告げの「里山の景」を演出

○吟望の春爛漫（桜と富士の景）

吟望台周辺に桜を補植し春爛漫に咲き誇る“日本平富士”を象徴する「桜の景」を演出

○駿河新緑の香（茶畑と富士の景）

一番茶の収穫期である5月の茶の香りを“駿河の香り”に見立て「茶の香の景」を演出

○日本平の薫風（公園展望と富士の景）

山頂部展望回廊から見渡す青葉の香りを吹きおくる初夏の清々しい「風の景」を演出

○晩秋の枯野（大和神話と富士の景）

平原を見立てた大芝生広場とグラスランドスケープによる「草薙の伝説の景」を演出

○富士の暮雪（日本画と富士の景）

日本画の原点ともいえる東展望台から見る冬富士を構図とした「富士山図の景」を演出

○花苑の夕照（林床の彩りと富士の景）

夕日で染まった丘陵斜面地を花木や山野草で修景した「彩りの景」を演出

○清水湊の帰帆（清水港と富士の景）

ホテルの芝生広場を前景に清水港の景を借景として取り入れた「日本美港の景」を演出

黎明の景観軸

本軸は富士山に最も近い位置から日の出が見られる方向を景観軸として設定し、6月～7月の日の出前の黎明的な水墨景観を対象景観とする。（北より+60°）

名月の景観軸

本軸は富士見の景観軸とほぼ直角の方向が中秋の名月の20:00～22:00の方向と一致することから、東展望台を名月を愛でる観月台として見立て月の出の方向を景観対象として設定する（北より+120°）

南アルプス景観軸

本軸は富士山から北西側に続く南アルプスの山並みを景観対象とし、太陽の日の入りが最も南アルプス側で沈む夏至の日の方向を景観軸として設定する（北より-60°）。また、富士山景観軸のほぼ90°に位置し本公園の主軸のひとつとして捉える。

景観演出計画図

